

今日の日本 OR 学会

# 機関誌編集委員長という仕事 —現役編集委員長のひとりごと—

猿渡 康文

## 1. 風変わりな編集委員長の誕生

月初め、メールボックスに、日本オペレーションズ・リサーチ学会から機関誌「オペレーションズ・リサーチ：経営の科学」が何事もなかったかのように届く。いち会員として30年超、そのことは当たり前のこととして享受していた。事態が急変したのは遡ること2年前である。歴代とは少しばかり趣の異なる編集委員長が誕生したのである。綿密な計画など苦手と公言して憚らず、白紙の機関誌が夢に出てくるような繊細な神経など持ち合わせていない“おおざっぱな性格”に加えて、最後は何とかなるという全く根拠のない信念だけはもっている。こんな“楽観主義者”に編集委員長の大役が務まるのか、多くの人が抱くであろうそんな疑問を抱えつつ、受けたからには“楽しく最後までやり遂げよう”と前向きに考え、今日に至っている。

本稿では、現役の編集委員長として、編集委員会や機関誌に対する思いを少しばかり“ひとりごと”として書き記したいと思う。一風変わった記事のように映るかもしれないが、ご容赦願いたい。

## 2. 機関誌への思い

### 学会における機関誌の役割とは何か

編集委員長になって、柄にもなく機関誌の意味を考えるようになった。いろいろな考え方がありえるので、正解と呼べるような解はないのかもしれない。ならば、編集委員長の色(=嗜好)を出して、“こんな役割はどうですか”と問うてみようと考えようになった。

### ORを“もっと”広く社会に認知・浸透させたい

このような“思い”を抱くようになったのは、元会長と直にお話をする機会に恵まれたことが大きく影響しているように思う。数士文夫元会長と大宮英明元会

表1 研究発表会における企業単独・共著発表件数の割合<sup>1</sup>

|         | 発表件数<br>(a) | 企業・共著件数<br>(b) | 割合 (b/a) |
|---------|-------------|----------------|----------|
| 2010 年春 | 107         | 21             | 19.6%    |
| 2010 年秋 | 106         | 18             | 17.0%    |
| 2011 年春 | 123         | 27             | 22.0%    |
| 2011 年秋 | 180         | 34             | 18.9%    |
| 2012 年春 | 124         | 26             | 21.0%    |
| 2012 年秋 | 138         | 33             | 23.9%    |
| 2013 年春 | 128         | 29             | 22.7%    |
| 2013 年秋 | 129         | 24             | 18.6%    |
| 2014 年春 | 136         | 24             | 17.6%    |
| 2014 年秋 | 138         | 30             | 21.7%    |
| 2015 年春 | 165         | 18             | 10.9%    |
| 2015 年秋 | 124         | 27             | 21.8%    |
| 2016 年春 | 154         | 22             | 14.3%    |
| 2016 年秋 | 139         | 25             | 18.0%    |
| 2017 年春 | 212         | 46             | 18.0%    |

長である。お二人のお話は、豊富な実務経験を背景に、ORの実情や期待を雄弁に語っており、この“もっと”という“思い”を強くさせた。そもそも、学会のwebページには、「ORは実学である」と書かれている。社会との繋がりを強くもった学問に位置づけられている。ORの社会的な認知は進んでいるだろうか。浸透しているだろうか。

実際、現実の事例を扱った研究成果の発表は、機関誌の事例研究などの投稿論文においても、研究発表会においても限定的である(表1参照)。2016年3月号「特集 日本におけるオペレーションズ・リサーチ—OR学会の活動—」で行った「OR座談会」では、“OR”という言葉を書くことはめったにない、といった産業界からの(悲鳴ともとれる)発言が記されている。

### ORを“もっと”身近なものに

このことが重要ではないか。そう思うようになった。“身近な存在”となるために、社会的に見えていないものを見える化してはどうか。そう思い、社会を対象に、

2015~2018 年度機関誌編集委員長  
さるわたり やすふみ  
筑波大学ビジネスサイエンス系  
〒112-0012 東京都文京区大塚 3-29-1

<sup>1</sup> 筆者調べ。カウントミスの可能性は否定できない。

- ・OR って、このようなものなんだ、と具体的にイメージしてもらえるような特集
- ・OR って、こんなことに役に立つんだと理解してもらえるような特集

を組んでどうかと、編集委員会に問うてみた(表2)。たとえば、「Society 5.0 と社会応用へのOR」や「オリンピック・パラリンピックの東京開催にむけて」は、社会的にも関心の高いテーマであり、その一方でORが大いに活用できるフィールドでもある。また、「学生たちのOR」や「続・学生たちのOR / 新しいOR教育の試み」では、素人と専門家の中に位置する大学生・大学院生による研究成果をコンパクトにまとめた。そこでは、ORの社会への適用事例を数多く取り上げ、ORの役割や効用を平易な言葉で語ってもらった。実際、未来の日本OR学会を支えるであろう現役の高校生などに興味をもってもらおうと、2,500ほどの高等学校等へ配布した。このような特集は、ORを見える化し、ORの裾野の拡大に寄与するのではないだろうか。

もちろん、会員やORを専門とする研究者・実務家を対象として、

- ・研究の幅を広げるのに役立つような特集
- ・教育活動に役立つような特集

も組んでいただいた。研究者・実務家の研究領域や知識の幅を広げることに寄与できることも機関誌として重要と考えている。

編集委員長の色を色濃く出した誌面作りをしたいとは思っていない。自然な形で浸透していってくれればと願うばかりである<sup>2</sup>。

### 3. 編集委員への思い

編集委員はボランティアベースである。編集委員長としては、そのような編集委員が気持ちよく活動できる環境を作ることが大切だと思っている。特集の企画でも、編集手順の提案でも、編集委員がやりたいと思ったことを、その実現に向けて前向きにサポートするように心がけている<sup>3</sup>。その一方で、編集委員長へのダメだしはウェルカムである。そのようなことが自由に言える関係でありたいと常々思っている。

また、編集委員としての仕事を正当に評価するような仕組みの構築も重要だと思っている。編集委員が多くの時間を割くことになるのは、特集を担当する“担

当編集委員”を担うときである。このとき、担当編集委員は、特集のオーガナイザーの手配から、原稿のとりまとめ、校正など、作業量は膨大になる。彼らの献身的な誌面作りへの協力なくして、特集は完成しない。お気づきだろうか。2015年7月号から、機関紙の奥付に「特集担当編集委員」という欄を設けた。編集委員としての活動の正式な記録となるものである。活動の正当な評価の一端に位置づけられればと願っている。

さて、風変わりな編集委員長が編集委員長に就任してから、大きなトライアルを行っている。元気のよい編集委員の提案によるもので、編集作業をwebサービスを用いたものへ移行した。このwebサービス<sup>4</sup>では、企画の提案、原稿のとりまとめ、校正など、編集作業の大半を行うことができる。加えて、編集会議への出欠管理などなど、使いこなせないような機能が目白押しである。編集会議は“顔を合わせて”<sup>5</sup>という形を維持している。実際の作業は上述のwebで行っているので、編集会議には出席が困難そう、と思われる方でも、編集には十分に関与できる。われこそは、という方はぜひ手を挙げていただきたい。

### 4. 機関誌への期待

“現役”の編集委員長として、機関誌への期待を綴ってみたい。

#### 冊子体としての出版の意義の確認を

JORSJ や TORSJ が電子出版に基本的には移行した<sup>6</sup>。機関誌はその一方で冊子体での出版を維持している。機関誌は冊子体として手元に毎月否応なしに届く。“特集は何かな”、“面白そうな事例研究は載っていないかな”などなど、手元に届くからこそ、手に取ってみよう、目を通してみようという動機とともに行動が生まれる。冊子体での出版の意義は大きいと感じている。締切に追われることも楽しいものである。時代に逆行するかもしれないが、この形態を維持していければと思う。

#### 論文・事例研究、論文・研究レポートの充実を

アクセプトされにくい、といったマイナスの評判が立っているのだろうか。機関誌の目玉の一つである“論文・事例研究”、“論文・研究レポート”への投稿が増えない状況が続いている(表3)。JORSJ や TORSJ に掲載される論文とは異なる、研究成果を社会に還元

<sup>2</sup> 「編集委員長の色が出ていますよね」と、ある先生に指摘されたことがある。“こっそり”だったのに。

<sup>3</sup> ダメだしは出したいくない。出さないようにしようと思心を決めている。ただし、「そう来たか」といったときは…。

<sup>4</sup> 「日本オペレーションズ・リサーチ学会ポータル」という名称のクローズドなサービスである。

<sup>5</sup> 編集会議のあとには“お楽しみ”が待っているから、という説がある。名誉のために記しておくが、これまでのところ、帰宅難民になったことはない。

<sup>6</sup> 冊子体もあるらしい。

表2 2015年7月号から2017年4月号までの特集

| 特集タイトル   | 担当編集委員  |
|--|---|
| プロジェクトの見積りと発注の科学<br>ネットワークとモデリング<br>高校生に伝える OR<br>鉄道利用者視点の OR<br>海外へ行こう！<br>OR と数学・統計  | 高野祐一<br>中原孝信<br>宮代隆平<br>佐藤圭介<br>池辺淑子<br>鶴飼孝盛  |
| OR の応用とソフトウェア<br>データ解析コンペティション：リテールマーケティングの新潮流<br>日本におけるオペレーションズ・リサーチ—OR 学会の活動—<br>安全・安心・強靱な社会を実現するための課題と OR<br>個人情報保護法の改正とデータサイエンスの新潮流<br>はじめよう金融工学<br>ニューロマーケティング<br>OR 研究をめざす女子学生へ<br>Society5.0 と社会応用への OR<br>学生たちの OR<br>続・学生たちの OR／新しい OR 教育の試み<br>グラフ理論と OR | 原田耕平<br>生田目崇<br>鶴飼孝盛<br>佐久間大・石井儀光<br>関西支部<br>高野祐一<br>中原孝信<br>池辺淑子<br>石井儀光<br>鶴飼孝盛<br>鶴飼孝盛<br>高野祐一 |
| オリンピック・パラリンピックの東京開催にむけて<br>データ解析コンペティション：次世代への架け橋<br>多目的意思決定の深化と応用<br>さきがけというフロンティアで探求する情報系研究者達  | 小林隆史<br>生田目崇<br>蓮池 隆<br>中原孝信  |

表3 2015年7月号から2017年4月号までに掲載された論文

| 論文タイトル  | 区分        |
|---|-----------|
| 季節性を考慮した協調フィルタリング連想のつながりの強さによるブランド・イメージの理解—項目反応理論の段階反応モデルの活用— | 論文・事例研究   |
| 下方リスクを考慮した多期間最適執行戦略モデル  | 論文・研究レポート |
| Online-Offline チャネルにおける消費者の購買間隔と購買金額の同時モデリング                  | 論文・事例研究   |
| 最大電力供給の統計的解析と節電について—東日本大震災がもたらした構造変化—                         | 論文・事例研究   |

することを主眼においた新しいジャンルの論文を掲載するなど、研究成果の公表媒体としての新機軸の創出も必要ではないだろうか。既存の投稿規定、査読制度の見直しも必要かもしれない。いずれにしても、多くの投稿を期待している。

## 5. おわりの言葉に代えて

機関誌は、60年を超える歴史を有する日本 OR 学会の顔の一つである。学術界の出版物の中では、月刊を続けている貴重な存在に位置づけられる。そのよう

な雑誌の編集に携わることは、責任ももちろんあるが、大変光栄なことであり貴重な経験をさせていただいていると感謝している。貴重な経験をさせていただいているからこそ、

### 学会における機関誌の役割とは何か

この問いに答えがあるのか、自問自答する苦悶の日々は続く。皆さんの手元に、月初めに、間違いなく機関誌が届きますように。風変わりな編集委員長に、今しばらくお付き合い願いたい。